

ビルマ語の特徴について

—大阪大学外国語学部ビルマ語研究室の紹介にかえて—



海外交流

加藤昌彦*

Linguistic Characteristics of Burmese

Key Words : Burmese, Tibeto-Burman

大阪大学外国語学部ビルマ語研究室の歴史は、日本で初めてのビルマ語の研究・教育機関として昭和20年4月に大阪外事専門学校にビルマ科が設立されたことに始まる。その後、昭和24年に新制大阪外国語大学のビルマ語学科として引き継がれ、さらに一昨年(平成19年)の大阪大学との統合によって、新しい歴史を刻み始めた。現在のビルマ語研究室では3名の日本人教員と1名のビルマ人教員が教育を担当している。さて、拙文では、当研究室で専攻言語として教育されているビルマ語について、私の専門である言語学の立場から紹介したいと思う。

ビルマ語はミャンマー連邦の公用語であり、イラワジ川流域やベンガル湾およびアンダマン海沿岸の平野部を中心に話されている。ミャンマーの人口は5,322万人(2004年政府推計)であり、少なくともその7割から8割ほどはビルマ語を母語として話すと考えられる。ミャンマー以外では、バングラデシュにビルマ語の方言を話す人々がいることが知られている。例えばマルマ族として知られるバングラデシュの少数民族が話す言語はビルマ語の方言である(藪1993)。

ビルマ語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する言語である。シナ・チベット語族というのは、中国語、チベット語、ビルマ語などを始めとする数百言語を含む一大言語群で、数千年前に

は一つの言語だったと考えられている(詳細は西田2000を参照)。これが長大な年月をかけて、様々な言語に分岐していったのである。シナ・チベット語族はさらに、漢語派、チベット・ビルマ語派、タイ語派、ミャオ・ヤオ語派などのグループに分けられる。うちタイ語派とミャオ・ヤオ語派に関しては、シナ・チベット語族に属しないとする説もある。チベット・ビルマ語派に属する言語には少なく見積もっても二百から三百の言語があり、チベット語群、ロロ・ビルマ語群、チン語群、ボド・ナガ語群、羌語群などいくつかの言語群に分類できる。ビルマ語はこのうちロロ・ビルマ語群に属する。この言語群に属する言語には、他に中国やタイなどで話されるロロ語、ラフ語、アカ語、リス語など様々なものがあり、ビルマ語の近い親戚に当たると言ってよい。

ビルマ語の音素(=音声を体系的に捉えたときの音の種類のこと)には次のようなものがある。研究者によって音素設定は異なるが、ここでは私の考え方を示す。まず、子音には p, θ, t, c, k, ʔ, ph, th, ch, kh, b, ð, d, j, g, s, ɕ, h, sh, z, m, n, ɲ, ŋ, ɳ, hm, hn, hɲ, hŋ, w, y, hw, l, hl, r がある。多くの日本人にとって珍しく感じられるのは、無声共鳴音 hm, hn, hɲ, hŋ, hw, hl の存在だろう。たとえば hm は、[m] を発音する要領で、声帯をふるわせずに息を鼻腔に抜く。また、閉鎖音(破裂音)には p : ph のような無気音と有気音の対立があり、日本人には区別が難しいが、この区別は東南アジア大陸部から中国周辺部にかけての諸言語にはよく見られるものである。母音には i, e, ɛ, a, ɔ, o, u の7つがある。e と ɛ の区別と o と ɔ の区別は、日本人には難しく、聞き取りに自信が持てるようになるまでには時間を要する。

また、ビルマ語には重要な音声特徴として声調がある。声調とは、音程の高低あるいは旋律線の違い



* Atsuhiko KATO

1966年2月生
 東京大学大学院人文科学研究科修士課程
 修了(1992年)
 現在、大阪大学世界言語研究センター
 アジア言語文化圏研究部門Ⅱビルマ語
 准教授 博士(文学) 東南アジア言語学
 TEL : 072-730-5284
 FAX : 072-730-5284
 E-mail : atsuhiko@world-lang.osaka-u.ac.jp

によって単語の意味を区別する現象である。日本語東京方言型のアクセントも音程を用いるという点では似ているけれども、東京方言型アクセントの場合、語中のどの音節にアクセントがあるかが意味を持つものに対して、ビルマ語のような声調言語の場合、ある音節が複数ある声調のうちいずれを取るかが意味を持つ。ビルマ語には3つの声調がある。例えば、低く平らに *sà* と発音すれば「手紙」という意味になり、高く平らに *sá* と発音すれば「食べる」という意味になり、高いところから急激に下降させて *sâ* と発音すれば「始まる」という意味になる。声調を持つ言語は、東南アジア大陸部から中国にかけては極めて多く、一種の地域特徴 (areal feature; 特定の地域に共通に見られる言語特徴のこと) と捉えることができるだろう。なお、早田 (1999) によれば、日本の京阪神の方言や、九州の方言の一部には声調があると見なすことができるという。この考え方に基づけば、例えば大阪方言の「気(きい)」と「木(きい)」の区別は声調の違いによる区別であると見なせる。この意味では日本も、東南アジアから東アジアに連なる言語地域の一部と考えることができ面白い。声調を持つ方言が西日本に偏った分布を示すことも、東南アジアや中国への地理的近さを考えると示唆的である。

ビルマ語は、一単語が一音節から成る場合が多い単音節言語 (monosyllabic language) である。これも地域特徴のひとつと言ってよい。例えば、基礎的動詞を例にとってみても、*θwá* 「行く」、*là* 「来る」、*sá* 「食べる」、*cí* 「見る」、*?ei?* 「寝る」など、単音節の語彙が多い。しかし、すべての単語が単音節だというわけではなく、複合による複音節語も多いのであり、また、Matisoff (1998) が指摘するように、*gǎzá* 「遊ぶ」、*dǎgá* 「門」のような、声調を欠く軽声音節を初頭に持つ「一個半音節」(sesquisyllabic) の単語も多い。

次に文法的な側面に移る。ビルマ語の主要な品詞には、名詞、動詞、助詞がある。形容詞がないことに疑問を感じた方もいるかもしれない。しかし、「大きい」や「美しい」などの日本語の形容詞に意味的に対応するビルマ語の単語は、動詞の仲間に入る。これらになぜ形容詞というラベル付けをしないかという、動作を表す動詞と区別するべき明瞭な文法的基準が見当たらないからである。強いて区別をし

たい場合には、動態動詞と状態動詞というような呼び方で区別する。

ビルマ語の基本語順は日本語と同じく、SOV である。例えば「私ご飯を食べた」は、*nà thǎmín sá dè* (私-ご飯-食べる-現実法) となる。そして日本語と同様に、比較的一貫して修飾語が被修飾語の前に置かれるという特徴を持っている。しかし、状態動詞と名詞の位置関係に関しては、議論の分かれるところである。というのは、例えば、「大きい店」を表す主な言い方には、日本語と同様の語順である、(a) *cí dē shǎin* (大きい-連体節形成助辞-店) という言い方と、日本語とは逆の、(b) *shǎin jí* (店-大きい) という言い方があるからだ。Dryer (2003) は (b) を基本として扱っているが、私は (a) が基本だと考える。なぜなら (b) は、*shǎin* (店) と *?áci* (大きい物) の複合した複合名詞であると見るべきだからである。(b) においては *cí* の初頭音が有声化している。名詞や動詞といった自立語の初頭音の有声化は複合に際して見られる現象だから、(b) は複合語である。一方の (a) は、*cí* (大きい) と *shǎin* (店) が独立した単語としての地位を保っている。基本語順を述べる際には、独立した単語間の順序をまずは対象にすべきであろうから、(a) を基本とするのが良い。ところで、チベット・ビルマ系に属する言語は大部分が SOV 型であるが、東南アジア大陸部で話されている他の系統の言語は一般的に SVO 型である。例えばミャンマーの隣国で話されているタイ語は SVO 型である。

ビルマ語の動詞には、動詞文標識と呼ばれる一連の助詞が後置される。これの最も基本的なものに *tè* と *mè* がある。動詞 *pha?* 「読む」を使って例を示すと、*pha? tè* は「読んだ」あるいは「(習慣的に) 読んでいる」という過去あるいは現在の事態を表し、*pha? mè* は「読む」という未来の事態を表す。これらはそれぞれ、「過去・現在」および「未来」という時制 (tense) を表すというよりも、話者がその事態を現実のものとして捉えているかどうかを表すとされることが多い。言語学ではこのような現象は「法」(modality) という概念で説明される。ビルマ語を含めて東南アジアの言語には、時制を持たない言語が多い。これも地域特徴のひとつであると言ってよい。

SOV 型の言語は、語順によって主語や目的語な

どの文法関係を表すことができないため、一般的に語順とは別の方法で文法関係を表す。その一つの方法が、日本語のように後置詞(格語尾)を用いることである。ビルマ語にも日本語と同じように、名詞の後に置いてその名詞と動詞との関係を表す様々な助詞がある。màunmàun gâ yáthá nê yàngòun gò θwá dè (マウンマウン-が-汽車-で-ヤンゴン-に行く-現実法) という文は「マウンマウンが汽車でヤンゴンに行った」という意味を表す。この文の中で、gâ は動作の仕手を、nê は手段を、gò は行き先をそれぞれ表している。このような助詞の存在および、名詞の格変化や動詞の活用といった屈折がないという特徴のため、ビルマ語は日本人にとってはなじみやすい言語であると言っていいだろう。

最後に拙文の内容をビルマ語で要約して示す。ビルマ文字は直接の起源となったモン文字の時代を含めると千数百年の歴史を持つ。より古くはインドのパッラヴァ文字に歴史を辿ることができる。視力検査のランドルト環のような形をしていて印象的である。

(引用文献)

西田龍雄 (2000) 『東アジア諸言語の研究 I 巨大言語群 --- シナ・チベット語族の展望』 京都:京都大学学術出版会.

早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』 東京:大修館書店.

藪 司郎 (1993) 「マルマ語」 亀井孝他編『言語学大辞典』 第5巻, pp.346-348. 東京:三省堂.

Dryer, Matthew S. (2003) Word order in Sino-Tibetan languages from a typological and geographical perspective. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, pp.43-55. London and New York: Routledge.

Matisoff, James A. (1998) Tibeto-Burman tonology in an areal context. In S. Kaji (ed.) *Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Typology, and Related Topics*, pp.3-32. Tokyo: ILCAA.

မြန်မာဘာသာသည်တိဘက်မြန်မာဘာသာများအုပ်စုတွင်ပါဝင်သောဘာသာစကားတစ်ခုဖြစ်ပါသည်။တိဘက်မြန်မာဘာသာများအုပ်စုတွင်ဘာသာများအနည်းဆုံး ၂၀၀-မှ ၃၀၀-ခန့်ပါရှိ၍ မြန်မာဘာသာနှင့်အနီးစပ်ဆုံးဘာသာများမှာ မြန်မာနိုင်ငံနှင့်တရုတ် နိုင်ငံတွင် တွေ့ရှိနိုင်သော မရှူ၊ လရှီ၊ အဇီး ဘာသာများဖြစ်ပါသည်။

မြန်မာဘာသာကိုမြန်မာနိုင်ငံ၌ရိုးသုံးစကားအဖြစ်သတ်မှတ်ထားပါသည်။ ဒေသိယစကားများသည်လည်းအမျိုးအစားအများအပြားရှိသည်ကိုသိရပါသည်။ အချို့သောမြန်မာဒေသိယစကားကိုဘင်္ဂလားဒေ့ရှ်နိုင်ငံတွင်ပင်လျှင်တွေ့ရပါသည်။

မြန်မာဘာသာသည်ဝဏ္ဏတစ်ခု၌အနက်အဓိပ္ပာယ်တစ်ခုရှိတတ်သောကေဝဏ္ဏဘာသာဖြစ်ပါသည်။ ဥပမာအားဖြင့် ‘လက်’ ‘ခေါင်း’ ‘ခြေ’စသည့်အခြေခံဝေါဟာရသည် အများအားဖြင့်ဝဏ္ဏတစ်ခုဖြင့်တည်ရှိပါသည်။

မြန်မာဘာသာတွင်တက်ကျသံသုံးမျိုးရှိ၍ ‘စ’ ‘စာ’ ‘စား’ဟူသကဲ့သို့ အတက်အကျကွဲလျှင်အဓိပ္ပာယ်သည်လည်းကွဲသွားသည်ကိုတွေ့ရပါသည်။

မြန်မာဘာသာ၏အခြေခံစကားလုံးအစီအစဉ်သည် ကတ္တား-ကံ-ကြိယာ ဖြစ်ပါသည်။ ယေဘုယျအားဖြင့် အထူးပြုသောစကားလုံးကိုအထူးပြုခံရသောစကားလုံး၏ရှေ့၌ထားပါသည်။ ဂျပန်ဘာသာနှင့်အသုံးအနှုန်းတူညီသောဝိဘတ်များလည်းများစွာရှိပါသည်။ ဤကဲ့သို့သဒ္ဒါထူးခြားချက်အတွက်ကြောင့် ဂျပန်လူမျိုးအတွက်မူမြန်မာဘာသာသည်အခက်အခဲမရှိဘဲသင်ယူနိုင်သောဘာသာတစ်ခုဖြစ်သည်ဟုဆိုနိုင်ပါမည်။